

開かれた系としての狩猟採集社会の研究

著者	佐々木 史郎
雑誌名	国立民族学博物館調査報告
巻	34
ページ	5-14
発行年	2002-12-20
URL	http://doi.org/10.15021/00001983

開かれた系としての狩猟採集社会の研究

佐々木 史郎

国立民族学博物館民族学研究開発センター

- | | |
|-----------------------|-----------------------|
| 1 狩猟採集社会、文化のモデル構築の問題点 | 2.1 北太平洋・カナダ極北地域の事例から |
| 2 本書の構成 | 2.2 東アジアの事例から |

1 狩猟採集社会、文化のモデル構築の問題点

考古学の研究分野の1つである先史時代の狩猟採集文化・社会研究は、膨大な発掘成果と最新の資料分析技術に裏付けられることによって、実証性が高まるとともに、その視野も大きく変わった。それは編者が本論文集の姉妹編として編集した『先史狩猟採集文化研究の新たな視野』(国立民族学博物館調査報告 33号)に集められた諸論文が端的に物語っている(佐々木 2002)。そこでは先史時代の狩猟採集文化、社会を研究するための新しい理論モデルを構築しようとする試みがなされ、従来の分析技術や理論モデルでは説明できなかった、先史時代の狩猟採集文化のより深く、より具体的な姿が明らかにされた。第1部では後期旧石器時代の開始から初期新石器時代かけての時代の、激変する環境への適応過程に関する論考がまとめられている。そこでは、後期旧石器時代の初期に文化的な適応という新しい戦略を導入して以来、人類は実に多様な適応方法を身につけて多様な環境に拡散していったとともに、その過程も従来考えられていた以上に複雑であったことが指摘された。第2部では縄文時代に対する評価とイメージについて、近年の三内丸山遺跡をはじめとする大規模な遺跡の発見から、縄文時代のイメージを安易に膨らませるのではなく、発掘された資料と精密な分析に基づいて、遺跡をより実証的に評価していくべきだという論考を中心にして、最新の縄文考古学の成果が披露された。それらによれば、遺物や集落跡といったごく限られた物質文化しか手がかりのない先史時代の狩猟採集社会や文化について、その食生活から集落の機能に至るまで、驚くほど精密な議論ができることが明らかとなった。

それに対して本書では、現実に展開されている、あるいは文字資料として具体的な情報が大量に残されているケースを扱うことが多い人類学者(ここでは文化人類学、社会人類学を指すこととして、自然人類学、形質人類学は除外しておく)や民族学者の論考を集めた。

人類学では考古学のように限られた物質文化から文化や社会の全体像を復元するとい

うきわめて困難な作業を行う必要はないが、具体的な情報が多いために、多様な解釈が可能である。とりわけ、言語を媒体とする情報が多いために、様々な言説 (discourse) やテキスト (text) を、それらが作成された、あるいは使われた文脈 (context) において読みとるという作業が必要になる。しかし、取捨選択する情報を操作したり、言説やテキストをおくべき文脈を故意に入れ替えたりすることによって、恣意的に解釈することも可能であり、それだけに考古学とは別の慎重さが要求される。ポストモダニズム批判やポストコロニアリズム批判はまさに情報や文脈が人類学者やその調査結果を利用する人々によって操作され、その結果構築された像が調査された人々の表象として権威を持って一人歩きをしていた点を批判したのであった。そのような権威を持って一人歩きをしていた表象の1つが、まさに自己完結的で閉鎖的で、柔軟性や発展性に欠け、貨幣経済などの外界からの刺激にもろくも崩れていくという狩猟採集文化や社会のイメージだったのである。

本書では、既に姉妹編の『先史狩猟採集文化研究の新たな視野』(国立民族学博物館調査報告 33号) に掲載した拙稿 (佐々木 2002) でも指摘したように、狩猟採集活動に従事してきた人々の文化や社会を、それだけで完結した閉じた系として理解するのではなく、異なるコミュニティ、あるいは異なる文化を持つ人々との間で絶えず人、もの、情報が交流し続けていたということを共通の理解とすることを前提とした論考を収録している。そのような理解は、先史時代を扱う考古学にせよ、現在や歴史時代を扱う人類学にせよ、その発掘や調査の経験と積み上げられた資料に裏付けされたものである。ことに、人類学的な研究ではそのような交流の現場を直接観察するケースが多い。

しかし、それにもかかわらず、従来の研究ではあるコミュニティ、あるいは文化を開放的なシステムとしてモデル化するという作業ができていなかった。多くの場合、狩猟採集活動自体やそれに基礎をおく社会をモデル化するに際しては、外界との結節点を認めながらもそれを閉ざして、一応閉じたシステムと仮定していた。それは、外界の影響を遮断した「純粹」な狩猟採集システムを結晶のように析出させようとしたからであろう。結晶のようなモデルは、狩猟採集活動に関係する諸要素のみで構成され、しかも抽象度を高めてあるために、より汎用性が高いのは事実である。考古学者や人類学者にしばしば引用されてきたビンフォードの「フォレジャー」(Forager) と「コレクター」(Collector) のモデル (Binford 1980, 1982) や「経済ゾーン」(Economic zone) のモデル (Binford 1982) などはその典型的な例であろう。これらのモデルは狩猟採集のみに依拠する社会や文化のみならず、農耕や牧畜、他の産業などと併存するような社会における狩猟活動を分析する上でも有効である。

しかし、ビンフォードのモデルをはじめ、従来の狩猟採集文化、社会に関するモデルには純粹な閉じたシステムと仮定することと並んで、さらに2つの点で問題があった。1つは、コミュニティやより大きな社会の構成員たる個人の能力や社会的な役割の多様性を、モデル作成に際して認めておらず、すべて平均的な能力を持つ狩師や漁師という設定にな

っている点であり、もう1つは純粋性を求めるために、現実には大量に混入しているはずの狩猟採集活動に直接関係のない要素を排除している点である。

確かに、両者はいずれも純粋なモデルを構築しようとするれば、前提として排除しておかなければならなかった。しかし、考古学でも資料の分析技術が向上し、大量の情報を扱えるようになり、また、民族誌の記述方法や解釈にも広がり見られるようになってきた今日では、このような点を排除すると、モデルと現実との遊離が大きくなりすぎてしまう。今日求められているのは、個人の能力の多様性や、非狩猟採集的な文化要素を含んでいることを前提とした上でのモデルなのである。さらには、狩猟採集に依拠するコミュニティや狩猟採集に従事する個人を包含したより複雑な社会や文化集団を研究するのに使える、より包括的な理論モデルも必要である。そして、そのような狩猟採集文化や社会の理論モデルを構築しようとするれば、狩猟採集活動とそれより生み出される文化、社会のシステムはそれだけで存立しうるものではなく、外に開かれたものとなるはずである。

例えば、現実の狩猟採集社会では、あるコミュニティ（狩猟採集社会の単位となるキャンプやハムレット、あるいは集落）の構成員全員が優れた猟師や漁師であることはありえない。それは農耕が始まる以前でも同様だろう。コミュニティは多様な能力と役割を持つ個人が集合することによって成り立ち、円滑に運営されるのである。そのような状況下ではコミュニティ内の個人あるいは家族の間で物資の交流が活発に行われることになる。

実はビンフォードのフォレジャーモデルやコレクターモデルでも、コミュニティ内の社会的な分業は織り込まれている。また、コミュニティ内の多様な能力と役割を持つ成員の社会的な地位に基づく分業体制や、婚姻や物資の交換を通じて形成される社会関係などを理論モデル化して社会構造を明らかにしようとするのは、社会人類学の基本的な方法であり、狩猟採集社会研究でも行われている。しかし、これから必要となるのは、コミュニティや集団内部の多様な能力を持つ個人から構成される社会関係に関するモデルを、自然環境への適応に焦点を当てた適応モデルと組み合わせ、自然環境と社会的な環境の双方の条件を同時に考慮に入れたモデルである。

さらに、能力や社会的役割の相違に起因する個人の多様性とその間の物資の交流は、コミュニティや同一の文化を共有する集団の枠を越えて広がりうる。また、コミュニティや文化集団単位で考えても、各集団が生産する物資は、それがおかれた自然環境と社会的な環境に規定されるため、必ずしもその成員が必要とするものをすべて生産できるとは限らない。そのためにコミュニティや文化集団どうしでの物資の交流が起きる。その時には当然人も動く。そして、そのようなコミュニティや集団の境界を越えた個人単位の関係や集団単位の関係を通じた人とももの交流によって、各コミュニティや集団には、所与の自然環境や社会的環境では生み出せない様々なもの、つまり、環境適応に着目したモデルでは「不純物」として排除の対象となるようなものが多数入り込む。さらに、そのような交流活動を担う人々や集団が、一つのコミュニティや文化集団にとっての外部に開く結節点と

なるわけである。

コミュニティや文化集団がいかに外に開かれるのかについては農耕社会や産業化社会では議論されてきたが、狩猟採集社会では事実が指摘されるだけで、いかなる結節点が設けられて、いかに外来の文化が摂取され消化されてきたのかについて分析し、それを抽象化してモデルを構築し、環境適応の視点で構築されたモデルと整合させようとする努力はほとんど見られなかった。しかしそれは、東アジアと北太平洋の狩猟採集文化や社会の研究では、きわめて重要な作業となる。というのは、この地域ではコミュニティ相互の結びつきとコミュニティと国家などの巨大な外部勢力との結びつきが、1つの狩猟採集コミュニティ、あるいは狩猟採集社会、さらには狩猟採集文化の存亡を左右していたからである。

例えば、あるコミュニティや文化集団の外界との結節点、あるいは接触方法としてしばしば取り上げられる活動に「交換」と「交易」がある。東アジアや北太平洋地域では資源の時空分布に大きな偏りが見られ、また歴史的な経緯もあるために、コミュニティや集団は経済的に、あるいは社会的に自己完結していないケースが圧倒的に多く、それぞれ「生産できないが必要とするもの」を求め合っている。それらがある集団どうして符合するとそこに物資の交換がおり、そのための社会関係が構築される。ここでは交換と交易の相違に関する議論は避けるが、「交易」には交換される物資の等価性が重視され、交易という活動を専門に行う、あるいはそれに長けた個人が存在したり、貨幣と呼ばれる特殊な交換財が媒体として使用されたりなど交換に比べるとより多くの要素が付け加わっていることが多い。

そのような交換や交易を通じて、外界の物資や情報、そして人も流入、流出を繰り返すことになるが、歴史的には狩猟採集活動以外の生業活動、すなわち農耕、牧畜、あるいは専門の職人が作り出す様々な製品類も流入してきて、それが必要不可欠な要素になってしまうこともしばしばあった。その典型的な例が銃器である。今や世界中の多くの猟師がライフルや猟銃がなくては猟ができない状況になっている。

また、交換や交易活動が国家のような巨大な統治システムの末端に位置づけられ、それを通して国家が狩猟採集のコミュニティにまで支配力を及ぼすことも多かった。東アジアの狩猟採集社会はほとんどすべて、中国、日本、朝鮮などの国家の支配下あるいは影響下にあったと考えて差し支えない。現在のロシア沿海地方の先住民であるウデヘ、アムール川下流域のウリチ、ニヅヒなどはその典型的な例である(佐々木 1996, 1997)。北太平洋地域の場合には古くから日本や中国などの支配下にあった人々もいれば(アイヌ系の一部の人々など)、ヨーロッパ人が進出して初めてそのような巨大なシステムに巻き込まれたものもいたが、18世紀までには東アジア、北太平洋地域のほぼ全域で、国家による狩猟採集社会の支配が行われるようになっていた。

そのような状況下におかれていた東アジアや北太平洋地域の狩猟採集社会の場合、非狩猟採集的な「不純物」を除いた純粋な社会、文化モデルが逆に現実理解の障壁にさえなり

かねない。というのは、「不純物」たる非狩猟採集産品や非狩猟採集的文化要素が、各コミュニティや文化集団の重要な物資や文化要素になっているからである。しかも、日本の縄文時代のように、膨大な発掘データが蓄積されていくと、明らかに長距離、近距離、様々なレベルでの物資の交換が行われていることが明らかにされてきて、農耕社会や牧畜社会、あるいは文明世界との接触がなくても、つまり狩猟採集専業のコミュニティや集団の間でも活発な交流があったことが事実とされてきている。そうなると、閉じたシステムとして構築された純粋な狩猟採集社会あるいは活動のモデルは、先史時代ですら適用すると現実にそぐわなくなってくるのである。

しかし、ここでいう「不純物」、つまり外界からの諸要素は、理論モデルを構築する上で大きな問題を孕んでいる。それは時間的あるいは歴史的な文脈である。

純粋な狩猟採集社会、あるいは狩猟採集文化のモデルは、所与の自然環境への適応という条件だけを満たせばよかった。つまり、変数は自然（あるいは自然史）に関するものだけだった。しかし、外界との接触をモデル構築に取り込むと、そこに歴史（人類の政治、経済、社会、文化などのあらゆる活動の歴史）という変数が加わって、より複雑になるとともに、先史時代のようにそのような変数が未知数の場合には、モデルが作れなくなってしまふ恐れもでてきてしまうのである。そうなると、先史時代の狩猟採集社会や文化の復元ははじめから不可能であるという議論になりかねない。

もの以外の情報を大量に得ることができる人類学や民族学の場合には、まさにその歴史の変数こそが現実を理解する上で最も重要な変数であり、それを自在に操る理論モデルの構築が求められる。それこそがポストモダニストやポストコロニアリストたちの批判に対抗する近道ではある。しかし、長期保存が可能な物質文化（集落跡も含む）以外の情報がきわめて少ない先史時代の状況まで射程に入れたモデルを作るとなると、この歴史の変数の扱いを慎重にしなければならない。常に「特定の時代、あるいは特定の政治・経済・社会状況にしか通用しないモデルではないのか」という批判がつきまってくるからである。

先史時代まで含むより射程の長い理論モデルを構築しようとすることは、考古学だけでなく、人類学にとっても重要な姿勢である。現在は一部の進化論の立場に立つ人々（新進化論）を除いて非常に消極的となっているが、人類の社会や文化の歴史をモデルとして復元しようとする試みは人類学の歴史において重要な地位を占めてきたからである。

『先史狩猟採集文化研究の新たな視野』に掲載した拙稿でも指摘したように（佐々木 2002）、国立民族学博物館の国際シンポジウムにおいて考古学者と人類学者の間になかなか越えがたい溝として横たわっていたのが、この歴史の変数の取り扱い方であった。考古学者はそれを超越したモデルをめざすのに対して、人類学者はそれを先史時代にまで延長しようとするからである。ただ、その議論からは次のようなことを学ぶことはできた。すなわち、歴史の変数の扱いに悩む人類学者は、一度自然条件の変数を重視するような分析を行って、モデル化し、それを現実に当てはめて検証してみる。そうすることによって、

歴史の変数がどのように作用するのがより明確になるのではないかとと思われる。他方、考古学者は人類学者が提唱する歴史の変数を重視したモデルを使って、先史時代の社会や文化を復元してみても、その場所の自然条件に照らして検証してみる。それによって、自然と歴史という2つの変数の微妙な扱い方が理解できるのではないかとと思われる。

ただし、人類学者がまだ歴史の変数を導入した狩猟採集社会や文化の理論モデルの構築に成功していないために（あるいはモデル構築、理論化という作業そのものの意味を認めなくなりつつあるために）、他分野の研究者が参照できるようなものがほとんどないのが実状である。本編はそのための最初の試みともいえるだろう。ここに収録された論考はいずれも、研究対象とする狩猟採集活動に依拠するコミュニティや集団、あるいは狩猟採集活動にかかわる文化を外界に開かれたシステムとして捉え、外との関係のあり方に重点をおいた研究である。そのために、本編に収録した論文はいずれも、狩猟、漁撈、採集といった生業活動のみに焦点を当てるのではなく、それらの生産物が個人の間、あるいはコミュニティや文化集団の間で往来することになる交換、交易という活動をも重視している。また、外部との結節点としては「通婚」も重要で、それに言及した論考もある。これらの論考は外界との結節点を持ち、非狩猟採集的な要素をも多分に含ませた狩猟採集文化、社会の理論モデルの構築に大きく寄与することになるだろう。

2 本書の構成

本書では扱う地域をもとにして東から西に向かうように配列した。第1部にはカナダ極北地域から、ユーラシア大陸の東端であるチュコトカ半島とカムチャツカ半島までの地域を対象とする論文を収録し、第2部にはサハリン（樺太）、アムール川流域、日本列島、そして台湾までの東アジア地域を対象とする論文を収録した。地域を基準にして分けたのは、国家との関係の歴史が異なるからである。

カナダ極北地域や北太平洋地域ではクリル諸島（千島列島）のアイヌを除いては、ヨーロッパ系の人々の進出まで国家という巨大な統治機構と関係したことがない人々が大多数であった。しかも、接触を始めた時代が17世紀から18世紀というヨーロッパ世界が近代化しつつあった時代であり、そこでは銃器を主体とした武力、資本主義と市場原理に基づく経済機構、経済力を持つ市民を主体とした新しい国家機構など、後に全世界を席卷する強力な政治、軍事、経済システムを形成しつつある時代であった。そのような強力な外部勢力にいきなり晒された北太平洋地域の狩猟採集社会は、軍事的な圧力や政治的な圧力と共に、移民という人的な圧力や大量生産で作られた物資という経済的な圧力も受けて、崩壊して消滅する社会、生き残ったものの大きな変化をうけて完全に変質してしまう社会などが続出した。例えば、カムチャツカ半島のイテリメンは大量に流入したロシア系の移民によってほとんどが駆逐されるか同化され、独自の社会を失っていった。

中にはチュコトカ半島のチュクチやアメリカ北西海岸の先住民のように武力で対抗できたものもあり、また北アメリカ極北地方のイヌイトやエスキモー系の住民のように、あまりにも自然が厳しく、遠隔地であったために、ヨーロッパ系の人々の進出や支配が遅れて、その結果比較的遅くまで独自の社会が生き残ったものもいた。しかし、彼らも20世紀に入ると急速に国家の支配、国家の経済に組み込まれ、その枠の中で生き残りを計るしかなくなる。結局国家の中で「少数民族」あるいは「先住民族」という範疇を作られてその中でしか生きていけなくなるのである。

それに対して、東アジアの狩猟採集社会や文化は比較的早くから国家との関係を持ち、その中で生きる道を模索してきた。それは中国という巨大な国家が存在したためだが、中国は近代化されたヨーロッパ世界とは異なり、中国の権威を認める限りは狩猟採集社会に対して大幅な自律性を許し、特定の産物（貢ぎ物と恩賞）を媒体とした緩やかな政治、経済関係を保つことで満足していた。そのために、狩猟採集民の社会や文化も変容はしたが消滅することはなく、アムール川流域の地域のように国家の中で特権的な地位を与えられるようなケースもあった。この地域の狩猟採集社会の場合には、清朝という満洲が築いた中国最後の王朝の建国に貢献しており、彼らは東アジアの「近世史」を担った重要なメンバーだったのである。

しかし、それも19世紀中期に近代化したヨーロッパ世界がここまで進出し、日本、中国をはじめ東アジアの諸国がその影響で近代化を始めると、状況は北太平洋地域と同じになっていく。狩猟採集社会はそれまで築いてきた国家との関係を一方的に破棄され、大量の移民が送り込まれて、土地が「開発」され、また大量の工業製品が流入して彼らの経済生活は根底から覆されていくのである。そして、それとともに、北太平洋地域と同様に「少数民族」、 「先住民族」という範疇に押し込められていく。

2.1 北太平洋、カナダ極北地域の事例から

北アメリカ極北地方へのヨーロッパ人の進出と、彼らと地元の狩猟採集社会との活発な交易活動の開始は、考古学的な資料にも表れている。手塚薫の論文は、先史時代から歴史時代までの層位を確認できるラブラドル地方のヌネンガック遺跡で得られた動物骨の種類と量を分析したものである。そこから、遺跡を残した人々の居住と土地の利用サイクル、そして主要な食糧となったアザラシ猟の技術と獲物の変遷がわかるとともに、現代イヌイトの直接の祖先が登場する時代からは毛皮交易が活発になっていたことも明らかにされた。すなわち、先史時代の層位（プレ・ドーセット期からドーセット期）からはアザラシ、クジラなどの大型海獣の骨が多く出土したのに対して、チューレ期からはキツネやホッキョクグマの骨が現れ、さらに歴史時代のイヌイトとなるとホッキョクギツネやキツネ、ウサギ、ホッキョクグマなど明らかに交易用の毛皮にもなる獲物の骨の数量が多くなっていくからである。この論文は考古学発掘の成果であるが、扱う時代が近現代まで

含まれていることと、この遺跡の歴史の一部として毛皮交易が扱われていることから、本論集の方に収録した。

続いて、岸上伸啓の論文は北アメリカとユーラシア大陸にまたがるベーリング海峡地域で交易活動を行っていたシベリア・エスキモー（自称ユピギート）の社会構造と交易活動のあり方について、その関係性を歴史資料と民族誌資料の双方を用いながら論証した。それによれば、近隣のイヌイト、エスキモー社会の中でもシベリア・エスキモーだけに父系クラン（氏族）が見られたのは、彼らがヨーロッパ人と接触する以前からユーラシア側のチュクチやアラスカ側のエスキモーとの仲介者として活発に交易活動を行ってきたことと、18世紀末期以降ロシア人やアメリカの捕鯨者と交易を行ってきたことにより、富が蓄積され、その結果社会に階層分化が起こり、クランのような組織が発達してきたからだというのである。そして、19世紀末期以降となるとクジラとセイウチの乱獲によって資源が枯渇し、シベリア・エスキモーの生業が大型海獣猟から小型海獣猟に移行した結果、クランなどに基づく集団猟よりも個人猟の方が卓越していき、より柔軟性に富む小さな社会に変貌したというのである。

岸上が提唱する交易活動の盛衰に伴う経済条件と生業活動の変化と、それと連動した社会構造の変化のモデルは、外に開かれた狩猟採集社会あるいは狩猟採集文化のモデルを構築する上で非常に重要な地位を占めることになると考えられる。

池谷和信の論文では、岸上論文で扱われた地域のすぐ西隣に当たる、チュコトカ半島北部のチャウン湾周辺にいるチュクチ（トナカイ・チュクチ）の20世紀初頭における交易活動が、池谷自身の調査による聞き取りから復元されている。そこからは、彼らとアメリカ人との関係は相当深く、アメリカ人が持ち込む銃や金属製品が彼らの生活に完全に根付いていたこと、また、カムチャツカ半島には20世紀のはじめに相当数の日本人が来ており、地元のイテリメンやエヴェンと交易をしていたこと、そしてアメリカ人との交易と日本自との交易はその形態が異なっていたことなどを知ることができる。池谷が調査によって明らかにした事実はソ連時代に隠蔽されてきたものであり、チュコトカやカムチャツカといったユーラシア大陸の東端における外界世界との関係が、従来の民族誌で語られた以上に密であったことが判明した。

ヴィクトル A. シュニレルマンの論文は、カムチャツカ半島のイテリメンとコリヤークたちの間で見られた、ロシア人との接触以前から初期接触時代にかけての時代に盛んであった一種の安全保障としての個人間のパートナーシップを主要テーマに取り上げている。ここで扱われているのは国家のような強大な勢力との関係ではないが、著者によれば相互扶助的な個人間のパートナーシップのネットワークが、資源量の揺れに伴う地域全体の危機を回避する装置として働いてきたという。というのは、パートナーどうしは互いに不足するものを供給し合うことで成立しているからである。パートナーシップを締結する相手は同一文化集団のものだけでなく、異文化集団の出身者の場合も多く、ことにトナカイ飼

育民と海獣狩猟民や漁撈民との間のパートナーシップがしばしば見られた。また、シュニレルマンは同様の社会装置として異文化集団間の通婚も挙げている。姻戚関係を通じてパートナーシップと同じような相互扶助関係が生まれるからである。

この安全保障としてのパートナーシップや通婚関係は、周囲に狩猟採集社会しかなかった時代の狩猟採集社会、文化モデルを構築する上でも、重要なヒントになると考えられる。

2.2 東アジアの事例から

第2部最初の出利葉浩司の論文はアイヌの毛皮交易活動の実態とそれを支えた政治的、経済的、社会的な背景について、資料をもとに実証的に論ずる。アイヌ社会は渡辺仁が「エコシステム」という概念を導入して生態人類学的に分析して以来、森でのシカ猟とクマ猟、川でのサケ漁に依拠した生業形態を基礎とした社会を形成してきたとされてきたが、出利葉はそこにアイヌと和人、アイヌとサンタン人といった異文化集団との間の「交易」という要素を持ち込み、アイヌ社会の基礎の一部としようとした。

アイヌの交易に関しては海産物やラッコ皮と穀類、酒、ガラスビーズなどを交易品とした和人との取引については研究の蓄積があり、アイヌ社会にとって交易が非常に重要な要素であったことは古くから認められてきた。しかし、毛皮と毛皮獣猟の位置づけに関しては研究がほとんどなされてこなかった。この大部の論文は今まで知られてこなかったアイヌ社会の別の側面に光を当てただけでなく、アイヌの毛皮獣猟関連の史料を提示した点でも評価できるだろう。しかも、アイヌの毛皮獣猟隆盛の背景にはサハリン(樺太)における山丹交易の活性化、松前藩の介入、幕府の公認、直轄といったアイヌ社会の外の要因が大きくかかわっていたことも明らかにされた。

田口洋美の論文はロシア極東地域の沿海地方、アムール川下流域、サハ共和国の極北地域という3地域の先住民の狩猟漁撈活動を、自然環境と社会環境との対比で描いている。すなわち、まず自然景観と植生、動物相を紹介し、さらに地域ごとに狩猟漁撈暦と用具、捕獲技術を紹介しつつ、その背景となる社会的な変化にも言及している。生業暦は自然条件に左右されるところが大きいですが、採用される技術に関してはもっと複雑な要因が絡まって決定される。田口論文は自然と歴史という2つの変数が狩猟採集社会、文化にどのように作用するのかということの解明する上で重要なヒントを与えてくれる。

最後の野林厚志の論文は台湾先住民の事例である。民族考古学(エスノアーケオロジー)の方法論を使って彼らの狩猟活動を調査してきた野林は、彼らの生業体系、あるいは経済状況を狩猟採集と農業の複合体と捉える。そしてこの複数の種類の生業が彼らの生活の中でいかに使い分けられ、いかなる構造を持つ体系として捉えることができるかを検討する。このような姿勢は日本の「マタギ」と呼ばれる猟師の集落を研究する時にも通用するものであり、農耕開始以後における世界中の狩猟採集従事者の文化、社会の研究にも適用できると考えられる。日本の事例も含め、狩猟採集と農耕、農業との関係は底知れぬ深

いものであり、まだまだ研究の余地が多く残されている。

以上7編の論考に共通するのは、交易、交換、通婚などを通じて常に集落や文化集団の外と関係を持ちつつ、変化する自然環境と社会的環境に適応し、またそのような環境に能動的に働きかけてきた、狩猟採集社会のもう一つの姿である。それは従来あまり語られてこなかった姿であり、狩猟採集社会は脆弱で、自然と人との微妙なバランスの上に成り立ち、18世紀以来の欧米人たちの侵入によって滅亡の縁に追いやられてきたという通念とは一見矛盾するような姿である。恐らく、自然との微妙なバランスの上で狩猟採集活動が成立していたのは事実であり、それを崩すような力が働いたとき、狩猟採集社会が非常にもろい側面を持つというのは誤りではないだろう。しかし、この7編の論文で語られている人々は、複数の適応戦略（例えば生業型狩猟採集活動と市場志向型狩猟採集活動の併用）を駆使し、集落や文化集団の外に広がる交易、交換、婚姻などのネットワークを活用しつつ、近代化、グローバル化といった大きなうねりの中で、翻弄されながらも今日まで生き残ってきた。

確かに、この7編の論考が直接導く理論モデルはそれぞれ異なり、対象とした集団を包み込んでいた自然環境や社会情勢などに規定された、きわめて限定的なものとなるだろう。しかし、分業体制や生業層を利用した性格の異なる複数の生業戦略の併用や使い分け、交換、交易、婚姻などを通じた外界へのネットワークの広がり、外来の物資を活用した生産活動や社会活動の活性化など、いずれの事例にも見られる現象もある。そのような共通する現象や事項を丹念に整理していけば、長期保存可能な物質文化以外に情報が乏しい先史時代の狩猟採集社会についても、より開放的で、より複雑で、自然適応の変数だけでなく、社会適応への変数にも対応できるモデルを構築することが可能になるだろう。

文 献

Binford, Lewis R.

1980 Willow Smoke and Dogs' Tails: Hunter-Gatherer Settlement Systems and Archeological Site Formation. *American Antiquity* 45(1), 4-20.

1982 The Archaeology of Place. *Journal of Anthropological Archaeology* 1(1), 5-31.

佐々木史郎

1996 『北方から来た交易民—網と毛皮とサンタン人』東京：日本放送出版協会。

1997 「広域経済システムとウデへの狩猟」『社会人類学年報』23, 1-28。

2002 「東アジア・北太平洋地域の狩猟採集文化研究の新しい視野を求めて」佐々木史郎（編）『先史狩猟採集文化研究の新たな視野』国立民族学博物館調査報告 33, 5-20, 大阪：国立民族学博物館。